

敦煌加点本を巡る研究課題

小助川 貞 次

1. なぜ敦煌加点本なのか

日本における訓点語・訓点資料の近代的研究は、大矢透博士以降、先学諸兄によって着実な成果を積み重ね、すでに訓点語学という研究分野が確立されている。さらに石塚晴通教授の敦煌加点本の研究と小林芳規博士の角筆研究は、研究の視点を海外に向けさせる大きな転機となり、東アジア漢字文化圏を視野に入れたもう一つの新しい研究分野が確立されつつある。従来、漢文訓読は日本独自のものであると考えられていただけに、このことは研究史の上で特筆すべきことである¹⁾。この分野では中国語訓読、朝鮮語訓読、ウイグル語訓読、ベトナム語訓読に対する研究が進展し、漢文訓読をテーマとする国際的な研究発表の場も相次いでいる²⁾。このような他言語における訓読研究から得られる知見は極めて大きく、訓読・加点の起源については勿論のこと、仏典と漢籍という古典籍の二大範疇が、漢字文化圏の中でどのようなバランスのもとに維持・発展してきたのか、というような更に大きな研究テーマを設定することも可能である。

しかし、これら他言語における訓読・訓点研究に実際に携わっている日本人研究者となると、極めて少ない。日本国内現存の訓点資料を扱う研究者そのものが限られていることが最大の理由であるが、問題はそれだけにはとどまらない。筆者は漢字文化圏における漢文訓読に関心を持ち続け、2004年度からは科学研究費補助金の交付を受けて国内調査とともに海外調査（韓国、イギリス、フランス、ベトナム）を行っているが³⁾、その過程で海外調査についての基本的な情報が如何に少ないかということを実感した。

本稿ではこれら海外調査の内、大英図書館、フランス国立図書館で得られた知見をもとに

- 所蔵機関における保存・修復・公開の現状
- 敦煌加点本の調査方法
- 日本語訓点資料との関係

の三点についてまとめ、広く研究者に提供したいと思う。そうすることが、国内現存の訓点資料に対する研究の発展にも繋がると思うからである⁴⁾。

2. 所蔵機関における保存・修復・公開の現状

(1) 保存・修復の現状

敦煌文献は現在、大英図書館、フランス国立図書館（リシュリュー館）等、おもにヨーロッパの図書館に所蔵されており、正規の手続きを踏むことによって実地調査が可能である。ただし、保存状態は必ずしも良好とは言えず、厚紙に糊付けしたもの、表面を絹張り補修したもの、全体を透明フィルムでラミネートしたもの、天地を大きく裁断したものなど、日本の古写本の保存状態とはかなり異なる⁵⁾。敦煌文献がヨーロッパに持ち込まれた20世紀初頭の保存・修復技術を考えると、やむを得なかったと思われるが、現状では訓点のみならず、料紙の種類や紙背文書・書込状態を確認できないことも多い。

大英図書館の場合、保存・修復には修理部（総勢60名ほど）が当たり、また最近コンサーベーション・センター（Centre for Conservation）が増築されて、修理現場を見学できるツアー（毎週木曜日14:00-15:00）も行われている。しかし、修理部スタッフの大半はヨーロッパ文献の修理に当たるため、敦煌文献などを担当するスタッフは限られているのが現状である。

海外の文化財の保存・修復に関して、日本はこれまでも様々な技術協力・資金協力を行っており、その事業数は800件を超している。特に近年は、「文化芸術振興基本法」（平成13年12月7日公布・施行）、閣議決定「文化芸術の振興に関する基本的な方針」（平成14年12月10日）、「海外の文化遺産の保護に係る国際的な協力の推進に関する法律」（平成18年6月23日公布・施行）など事業の根拠となる法的整備のもとに、平成18年6月には「文化遺産国際協力コンソーシアム」が設立されて産学官の連携協力のもとに国際協力事業が展開されている。しかし、敦煌文献に関しては文化遺産国際協力コンソーシアムのデータで見ると、「サンクト・ペテルブルク蔵敦煌等文書保存支援事業」（1998年～）が唯一であり、敦煌文献を大量に所蔵する大英図書館、フランス国立図書館への組織的・継続的な支援は行われていないようである。

(2) 公開の現状

敦煌文献は原則として公開され、またIDP（International Dunhuang Project）がインターネット上で鮮明なカラー画像を提供しているので、閲覧・研究には何ら支障がないようにも思われる。しかし、IDPで公開されている敦煌文献の内、加點本となると非常に少なく、さらにフランス国立図書館所蔵のペリオ文献は公開されていないなど、IDP画像だけで閲覧・研究するには制約が多い。

一方、正規の手続きによって原本を閲覧する場合にも、言葉の壁以外にも様々な制約があり、閲覧は決して容易なことではない。大英図書館の場合、管理は中国部、修理は修理部、出納は閲覧係、出庫は書庫（ベースメント）担当者というように、組織が大きいために横の連絡が取

りにくいようで、カウンターで請求したものが手元に届くのに数日待たされることもある。また、フランス国立図書館の場合、請求から出庫までは非常にスピーディであるが、閲覧席が少ない上に、実際の閲覧は請求者本人のみというのが原則であり、分担して移点作業を行なう場合には注意が必要である。さらに、どちらの図書館も閲覧室は暗く、小さな加点を確認するのはなかなか容易なことではない。

3. 敦煌加点本の調査方法

(1) 手続き⁶⁾

《事前申請》

大英図書館、フランス国立図書館、どちらの場合も閲覧希望日、閲覧希望リスト、閲覧理由を記した事前申請が必要である。大英図書館はHP上の申請フォーム及び中国部担当者への連絡（できれば日本部担当者へも連絡しておいた方がよい）、フランス国立図書館は中国部担当者への連絡が必要であり、申請に基づいて審査が行われ、許可・不許可の連絡が来る。担当者が長期休暇で不在になることもあるので、最低でも一ヶ月前の申請が必要である。

なお、それぞれの申請及び現地図書館で使用できる言語は英語、フランス語であるが、フランス国立図書館では英語も使用できる。また中国部担当者との対応では中国語も使用できるが、日本語は使用できない。

《閲覧証（パス／カード）作成》

図書館を利用するためには、閲覧証（大英図書館所蔵では「パス」／フランス国立図書館では「カード」と称する）を作成しなければならない。氏名と住所を証明できるもの（パスポート、運転免許証、クレジットカード、所属機関発行の身分証明書・在職証明書など）を複数用意する。大英図書館は Reader Registration に行き、基本情報をパソコンで入力し受付番号をもらう。受付番号を呼ばれたら必要書類を提示し、簡単な質問に答えた後、その場で写真を撮ってもらう（顔写真を自分で持って行く必要はない）。研究者の場合、パスは3年間有効で料金はかからない。フランス国立図書館（リシュリュー館）は Service des Lecteurs で担当者から直接面接を受けながらカードを作成してもらう。写真もその場で撮影してくれる。ただしカードは有料で1年間有効で53€（3日有効で7€, 15日有効で35€）。

《入退館・入退室と手荷物の管理》

どちらの図書館も建物の入口で手荷物等の検査があるので、大荷物は避けた方がよい。敦煌文献を閲覧できる閲覧室は、大英図書館は3階の Asian & African Studies。入口でパスを提示

し自分で携帯する。フランス国立図書館は建物に入って左手奥3階の東洋写本室(Manuscripts orientaux)になる。カウンターでパスを預けると座席票(板)を渡してくれる(退室時に座席票を返しカードを受け取る)。

閲覧室に持ち込める手荷物は常識的な範囲に限られる(パソコンは持ち込めるが、飲食物やカメラなどは持ち込めない)。大英図書館は地階にロッカールームがあり、必要なものだけを透明なビニール袋に入れて閲覧室に入る。退室時にはノートや手帳の類も含めてすべての手荷物がチェックされるので、多くものを持ち込むと退室に時間がかかるし、ガードマンから注意されることもある。フランス国立図書館(東洋写本室)は閲覧室の中で鞆やコート等を預け、必要なものだけを持って着席する(ビニール袋は使用できない)。

《請求・出納の仕方》

どちらの図書館も請求票に必要事項を記入してカウンターに提出する。敦煌文献は一回に請求できる点数に制限があり、大英図書館は5点(閲覧は1点ずつ)まで、フランス国立図書館は3点まで(3点同時に閲覧可)。請求票に漢字は使えないので文献番号を記す(大英図書館は「Or.8210 / S.xxxx」、フランス国立図書館は「Pelliot Chinois P.xxxx」のように)。大英図書館は請求票に座席番号を記入する欄があり、出庫されると座席のランプを点灯させて知らせてくれるシステムになっているが、実際にはそうならないことが多く、適当な時間を見計らってから請求者本人が出庫されたかどうかを確認しなければならない。フランス国立図書館は司書の方が閲覧席まで持ってきてくれ、請求から手元に届くまでの時間は通常の図書館とほとんど変わらない。

返却はそれぞれカウンターで行なうが、一時返却して継続して見るか(keep)、完全に見終わって書庫に返却するか(finish)の確認が求められる。大英図書館では、敦煌文献は一度書庫へ返却してしまうと、再請求してもなかなか出てこない。

(2) 閲覧室の環境

《設備》

どちらの図書館も学術的・伝統的な雰囲気が深い、仕事ははかどる。ただ、日本の図書館と比べて室内は暗く、デスクライトはあるものの、訓点の確認は容易ではない。フランス国立図書館(東洋写本室)の場合、自然光が具合よく入る閲覧席は1席しかない。したがって、座るポジションによって訓点が見えたり見えなかったりということが起こりうる。大きな洋装本を広げるための枕のような形をしたブックスタンドはあるが、下敷きの類は無いので、和紙を持参するのが良い(大英図書館はビニールのデスクマットが敷いてあり、フランス国立図書館(東洋写本室)もビニールのデスクマットが埋め込んである)。文鎮は袋状のウェイトや石が使わ

れる。電源コンセントはどちらの図書館も有り、パソコンが使用できる（大英図書館ではパソコンが使用できない座席もある）。

座席数は、大英図書館（Asian & African Studies）は大部屋なので座席そのものは十分にあるが、貴重書を閲覧できる席はカウンター前の8席しかない。フランス国立図書館（東洋写本室）は全部で24席しかなく、内8席はマイクロリーダー用とデスクトップパソコン用なので、実際に着席できる席は16席しかない。

《使用できる機器》

文具類で使用できるものは、鉛筆（色鉛筆）、消しゴム、メジャー、拡大鏡、記録用の紙・ノート、パソコン、写真版（コピー）などである。ボールペン、サインペン、万年筆、ナイフなどは使用できない。角筆スコープのような光線を発するものは、閲覧室では使用できない。拡大鏡もデスクライトを点灯させていると光が収束して光線を発しているように見えることがあり、注意が必要である。その点、単眼のギャラリー・スコープや双眼ルーペ（外科医が使うようなメガネ）は光線を発することはないが、長時間の使用や移点作業には向かない。勿論、カメラは持ち込めない。

（3）IDP（International Dunhuang Project）の問題

IDPデータベース（<http://idp.bl.uk/>）が本格的に運用されるようになり、研究室に居ながらにして敦煌文献を閲覧できるようになった。公開されているカラー画像は、加点内容を十分に確認できる程度の精密度を持ち、資料の共有や編集など利用上の価値は非常に高い⁷⁾。2008年4月21日現在のすべての画像数（Number of Images in IDP Database）は、イギリス96,696点、中国17,635点、ロシア9,076点、日本12,544点、ドイツ10,872点、合計146,823点である。ただし先にも述べたが、利用できる加点資料は非常に少なく、またフランス国立図書館所蔵分が公開されていないなど、量的に不十分である。さらに、料紙の状態などの基本的な書誌情報が分からず、加点についての情報も当然のことながら記述されていない。IDPの画像公開の方針とユーザーから見た敦煌文献の価値とがかみ合っていないように思われる。

敦煌文献の加点について強い関心を持っているのは、日本と韓国及び欧米の数名の研究者だけと言っても過言ではない。敦煌文献の所蔵機関やIDPに対して、訓読や加点という現象がいかに重要なテーマであり、敦煌文献の価値基準の構築や保存・修復方法そのものにとってもいかに重要であるかということを力説して行かなければならないと思う。

（4）複製本等の準備

文献資料の調査に写真版が必須であることは言うまでもなく、特に移点作業を伴う訓点資料

の調査においてはなおさらである。現在、敦煌文献はほぼ全点について写真版が公刊されており、大英図書館所蔵分（スタイン文献）、フランス国立図書館所蔵分（ペリオ文献）については、以下の資料が利用できる（ただし一部の口絵写真を除き、白黒写真）。

- ・『敦煌宝蔵』（140冊，黄永武主編，台北新文豊出版，1981年～）
- ・敦煌吐魯番文献集成『法蔵敦煌西域文献』（34冊，上海古籍出版社・法国国家図書館編，上海古籍出版社，1995年～）
- ・『英蔵敦煌文献（漢文仏教以外部分）』（14冊，中国社会科学院歴史研究所・中国敦煌吐魯番学会敦煌古文獻編輯委員會・英国国家図書館・倫敦大学亜非学院，四川人民出版社，1990年～）

『敦煌宝蔵』は写真の質が悪く，漢文本文も十分に確認できない場合がある。これに対して『法蔵敦煌西域文献』『英蔵敦煌文献』は比較的上質であり，特に『英蔵敦煌文献』は一点毎の写真サイズも大きく，加点が確認できるものもある。実際の調査では，これらのコピーを使用するが，細かな加點内容を鉛筆で移点するため，コピー濃度を下げ（薄く），かつ拡大したものを使用するようになっている。

また後述するように，加點内容は科段，句読，破音が中心となるため，四声の区別がわかる資料（例えば『広韻』）や，経書の場合には陸徳明『經典釈文』を用意しておくことも必要である。

4. 日本語訓点資料との関係

2004年9月から2007年10までの4年間に調査した敦煌加點本（漢籍）は，以下に掲げる経部66点，史部4点，集部7点の合計77点である（一部，本期間以前の石塚晴通移点本を含む）。今後の調査でさらに増える予定であるが，いずれも7世紀中期から9世紀中期にかけての加點本であり，8世紀のものが多い。一方，日本の漢籍訓点資料では10世紀加點のものは、『宇多天皇宸翰周易抄』、『尚書』（岩崎本・九条本・神田本），『毛詩卷第六』（東洋文庫本），『春秋経伝集解卷第二』（藤井有鄰館本），『世説新書卷第六』（小川本・京博本・小西本・東博本），『漢書楊雄伝』（上野本），『漢書高帝紀』（石山寺本）の7種12点しか現存しない。敦煌加點本は圧倒的に数量が多い。特に『尚書』については，多くの部分で日本の資料と直接比較することができるばかりではなく，敦煌加點本内部での比較も可能であり，加點方法や加點の起源を考える上で，極めて価値が高い。

調査済敦煌加点本（漢籍）一覧（*印：無点本）

○経部（66点）

周易（4点）：S.6162, P.2530, P.3640, P.3683

毛詩（13点）：S.0010, S.0134, S.0541, S.1442, S.1722, S.3951, S.5705, S.6346, P.2506, P.2514, P.2529, P.2538, P.2669

尚書（21点）：S.0799, S.0801, S.2074, S.5626, S.6017, S.6259, *S.8464, P.2516, P.2533, P.2630, P.2643, P.2748, P.2980, *P.3605, P.3628, P.3670, P.3752, P.4033, P.4874, P.5543, P.5557

礼記（2点）：P.2500, P.3380

左伝（12点）：S.0085, S.0133, S.1443, S.5743, S.6120, P.2509, P.2540, P.2562, P.2981, P.3634, P.3635, P.3729

穀梁伝（2点）：P.2536, *P.4905

論語（12点）：S.0618, S.0800, S.5726, S.6121, S.7003, P.2628, P.2687, P.3467, P.3573, *P.3606, P.3607, P.3643

○史部（4点） 史記（1点）：P.2627 漢書（3点）：S.2053, *P.2485, *P.2513

○集部（7点） 文選（7点）：S.3663, P.2493, P.2525, P.2528, P.2554, P.2658, P.5036

（1）敦煌加点本の概要

敦煌加点本の加点内容や全体像については、石塚晴通教授の諸研究を始めとする先行研究に詳細に述べられているので本稿では繰り返さないが⁸⁾、これまでの調査で分かってきたことの概要のみを示す。

《加点内容》

加点内容としては、本文校訂の諸符号（見消、塗抹、補入、転倒符）、内容・篇章のまとまりを示す科段点、範囲を示すかと思われる符号（鉤印と大きめの点発）、句読点、破音が見られる。音義の引用書込は日本の漢籍訓点資料に比べると少ないが、『毛詩』と『左伝』では紙背に書き込まれるものもある（ただし、紙背を確認できない資料も多いので、この点に関しての全体像は分からない）。句読点は、ほとんどが句点（□、□）であり、読点（□・□）は作品名の表示、地名、人名の併記、注釈の形式（A・B也）を表す場合に限られる。

《加点範囲》

史部以下の調査が完了していないので明確なことは言えないが、経書、史書ともに加点は割注へも及ぶようである⁹⁾。ただし、経書でも経文のみしか加点されないものもあり（S.85『左伝』

など)、また加点が途中で終わっているものもある(S.799『尚書』など)。加点本か移点本かの判断も必要であり、さらに『毛詩』では経文のみのテキストも存在し(S.1772など)、テキストの内容によって古注を必要とする典籍とそうでない典籍があったことが分かる。テキストの内容と古注釈(割注)の有無、加点の有無とが密接に関係する問題である。

《加点方法》

基本的には朱点による加点が多く、墨点はほとんど用いられない。本文訂正に白点、黄粉、黄エナメルを用いるものもある。角点は現在の保存状態・閲覧環境では確認することが難しい。また朱点は、大きな胡麻点もあるが極小点もあり、さらにこれらが褐色に変色して料紙の色と紛らわしいものもあり、入念に確認する必要がある。

原義・派生義の別を示す破音の加点は、経書では通行本(通志堂本)『經典釈文』に記載される被注箇所・内容と比較的よく一致する資料もあるが、おおむね平易な漢字の意義弁別に関する場合が多く、さらに字体識別が目的と考えられる加点(日一日、己一己一己、才一寸)もあり、日本の経書訓点資料が『經典釈文』と全体的によく対応するのはかなり事情が異なる。実際の破音加点字を収集した破音データベースを作成する必要がある¹⁰⁾。

音注の書込(ただし紙背を確認できる範囲で)は、『毛詩』と『左伝』で見られ、『左伝』(P.2540, P.3729)では通行本(通志堂本)『經典釈文』とよく一致するが、『毛詩』(S.10)では一致するものと一致しないものとが混在しており、遠藤光暁(1990)(2001)によれば複数の毛詩音が使用されたとされる。同じ経書でも、その学習方法にはテキストの内容による違いのあったことが窺われる。

経書における『正義』利用については、明確なことはわからない。ただし、P.3635『左伝』(僖公)では紙背に『左伝正義』(哀公)が書写されており、『左伝』という内容でセットされていたことがわかる。また日本の『尚書』平安中期点や『春秋経伝集解巻第二』に見られる『正義』との対応箇所を示す符号(「～・)と同形態の符号が、『尚書』(P.3628, P.4033, P.4874, P.5543以上僚巻, P.2533, P.2643)、『左伝』(P.2509, P.2562)でも加点されており、これらが単なる科段点なのか、それとも『正義』などの注釈書と関係するものなのか、今後考察する必要がある。

《漢字文化圏における共通性》

実見した際の印象に過ぎないが、敦煌加点本の中には、仮にヨコト点と仮名点を加えたならば日本の漢籍訓点資料(特にヨコト点本位の『春秋経伝集解巻第二』)に極めて類似するものがあり、日本における漢籍訓点資料の発生を考える上で重要なヒントを提起している。さらに、漢籍における読書方法や加点方法が、漢字文化圏に共通するものであったとしたならば、朝鮮

語やベトナム語による漢籍訓点資料（ほとんど現存しない）ではどうであったのか、非常に興味を持たれるところである。

(2) 『尚書』における日本語訓点資料と敦煌加点本との比較¹¹⁾

日本の漢籍訓点資料と敦煌加点本において、同一本文同一箇所でのどのように加点されているのかを『尚書』を例として示す（破音・声点加点箇所はゴチックで、陸徳明『經典釈文』掲出（被注）字にはアンダーラインを施す。割行は《 》, 改行は/, 句点は., 読点は・で示す）。

岩崎本平安中期点（135行目～136行目、盤庚中末尾）

…我乃劓殄滅之亡遺

育亡卑易種于茲新邑《・劓割.育長也.不吉之人當割地滅/之无遺長其類.无使易種於此/新/邑也》

本行「劓」に朱去声点と左傍に墨筆「魚器反」の書込,「卑」に朱上声点,「易」に朱入声点,「種」に朱上声点,割行「長」二箇所¹²⁾に朱上声点,「易」に朱入声点,「種」に朱上声点あり,ヲコト点と仮名点は省略,句点は甲種墨点

P. 2516（26行目～27行目）

我乃劓殄滅之.亡遺育.亡卑易種于茲

新邑《劓割.育長也.不吉之人.當割絶滅之./無遺長其類.無使易種於此新邑也》…

本行「卑」中央に朱点発,割行「長」二箇所のそれぞれ中央に朱点発,句点は朱点

P. 2643（87行目～89行目、乾元二年(759)の書写奥書あり、移点本か）

…「我乃劓

滅之.亡遺育.亡卑易種于茲新邑《劓割.

育長也不吉之人.當割絶滅之.無遺/長其類.無使易種於此新邑也》…

本行「亡」二箇所のそれぞれ中央に朱点発,「卑」中央左下に朱点発,割行「長」二箇所のそれぞれ中央に朱点発,句点は朱点

『經典釈文』[劓] 魚器反徐吾氣反 [殄] 徒典反 [易] 如字又以鼓反注同 [長] 丁丈反下遺長同

『經典釈文』に掲出される「長」字が、本文・割注とも岩崎本、P.2516、P.2643の三本で同様に加点されていること、一方で『經典釈文』に掲出されない「卑」も、これら三本で同様に加点されていることは、単なる偶然とは考えられない。加点の際に『經典釈文』に拠ったかど

うかは別として、『尚書』というテキストに固有の読書方法・加点方法が、使用言語や地域を超えたレベルで存在したことが強く窺われる。

5. まとめと今後の課題

本稿において、敦煌加点本調査の必要性と可能性、所蔵機関における保存・修復・公開の現状、敦煌加点本の調査方法、日本語訓点資料との関係について述べた。現在、敦煌加点本の漢籍について全巻移点を前提にした調査を行っており、調査が進展すれば日本語による漢籍訓点資料との関係が一層明瞭になると予想される。

ただし、敦煌加点本は万能なのではなく、加点年代やテキストの内容によって敦煌加点本内部に違いが存在することも考慮する必要がある。さらに敦煌加点本は飽くまでも敦煌加点本なのであって、唐代長安写本そのものではないという点にも十分に注意する必要がある。そのためにも敦煌加点本の全体像を見渡せるような「点本目録」を早急に作成することが重要な課題となる。デジタル化が進めば、原本閲覧の機会が著しく狭められることも予想されるからである。それとともに、調査・移点した資料をどのように客観的に記述するかという処理方法についても考えなければならない。日本の訓点資料で行われている訓読文方式では対応できない¹²⁾。

敦煌莫高窟から敦煌本が発見されて100年（スタイン 1907年、ペリオ 1908年）になるが、我々が今まで以上に訓読研究・訓点研究の観点から敦煌本にアプローチすることは勿論のこと、所蔵機関がその道を閉ざさないように、国際的な協力体制をどのように構築するかということがさらに重要な課題となろう。この場合、研究者・利用者、所蔵者、修理者が別々の観点から発言するのではなく、三者が一体となった組織体制の中で、どうすることが人類の利益や未来や幸福に繋がるのかといった根源的な観点から考えることが必要である。

注

- 1) 石塚晴通(1967+), 小林芳規(1995+), 小助川貞次(2004+), 庄垣内正弘(2001), Nguyen Thi OANH(2006) など。
- 2) 筆者が参加した2001年以降の主な国際会議は以下の通り。
国際ワークショップ「漢文古版本とその受容(訓読)」(北海道大学, 2001年8月)
国際ワークショップ「典籍の国際的交流・受容(訓読)」(北海道大学, 2002年10月)
日韓漢字・漢文受容に関する国際学術会議(富山大学, 2003年7月),
国際学術会議「日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開」(北海道大学, 2004年9月)
国際東方学者会議シンポジウム「漢文の自言語による訓読」(東方学会, 2005年5月)
国際学術会議「漢文読法とアジアの文字」(ソウル市立大学校, 2005年9月)
国際ワークショップ「典籍交流(訓読)と漢字情報」(北海道大学, 2006年8月)
韓日国際ワークショップ「古代韓日の言語と文字」(ソウル大学校, 2007年7月)
国際シンポジウム「日本漢文の黎明と発達」(二松学舎大学, 2007年9月)
韓日国際ワークショップ「古代韓日の言語文化比較研究」(ソウル大学校, 2008年2月)
- 3) 「大英図書館所蔵朝鮮本及び日本古書の文献学的・語学的研究」(基盤研究B・海外学術調査, 2004年～2006年, 研究代表者: 藤本幸夫), 「国際的視点から見た日本語・朝鮮語における漢文訓読に関する実証的研究」(基盤研究B, 2004年～2006年, 研究代表者・小助川貞次), 「国際的視点から見た漢字文化圏における漢文訓読についての実証的研究」(基盤研究B・海外学術調査, 2007年～2009年, 研究代表者・小助川貞次)。
- 4) 漢文訓読研究の国際的研究や国際的共有が一般社会ではほとんど認知されていないことについては小助川貞次(2007f)参照。
- 5) 渡邊明義(2004)に国際交流の観点から見た保存修復の意義について, またMark Barnard(2004)に大英図書館における保存修復の歴史についての言及があり参考になる。
- 6) 詳細は各図書館のHPで確認できる。
<http://www.bl.uk/>(大英図書館), <http://www.bnf.fr/>(フランス国立図書館)。なおフランス国立図書館(リシュリユー館)では改修工事を予定しているので最新の情報に注意する必要がある。
- 7) データ(画像)毎に著作権についての明示があるので注意のこと。
- 8) 注1)文献参照。
- 9) 日本の漢籍訓点資料における加点範囲の問題については小助川貞次(2005c)参照。
- 10) 小助川貞次(2007a)にその一部を掲げてある。
- 11) 詳細については小助川貞次(2008e)参照。
- 12) この問題については, 小助川貞次(2008e)(2008d)が有鄰館蔵『春秋経伝集解巻第二』を対象として具体的な処理方法を提示した。

参考文献

- 石塚晴通(1967)「中国中古の加点本につきて」(第17回訓点語学会)
石塚晴通(1968)「中国中古文献の加点と日本に於ける加点とにつきて」(第19回訓点語学会)
石塚晴通(1969)「声点の起源につきて」(国語学会研究発表会)
石塚晴通(1970a)「中国の加点本の沿革と日本への影響とにつきて」(第22回訓点語学会)
石塚晴通(1970b)「楼蘭・敦煌の加点本」(『墨美』第201号, 石塚晴通(1992)に再録)
石塚晴通(1973)「訓点の性格—日本の訓点発生時期資料と中国中古の訓点資料に於いて—」(第29回訓点語学会)
石塚晴通(1992)「敦煌の加点本」(講座・敦煌第5巻『敦煌漢文文献』, 大東出版社)

- 石塚晴通(1993)「中国周辺諸民族に於ける漢文の訓読」(『訓点語と訓点資料』第90輯)
ISHIZUKA Harumichi(1993) "The Origins of the Ssu-sheng Marks", ACTA ASIATICA, 65, The Toho Gakkai
- 石塚晴通(1994)「訓点語研究 今後の展望」(『訓点語と訓点資料』第93輯)
石塚晴通(1995)「声点の起源」(『日本漢字音論輯』所収, 汲古書院)
遠藤光暁(1990)「在欧のいくつかの中国語音韻史資料について」(『開篇』7)
遠藤光暁(2001)「敦煌《毛詩音》S.10V写卷考辨」(青山学院大学『論集』第42号)
小助川貞次(2004)「敦煌本毛詩鄭箋(S.10)の加点方法について」(第90回訓点語学会 → 小助川貞次(2007b)に収録)
小助川貞次(2005a)「訓積資料としての漢籍訓点資料」(第50回国際東方学者会議シンポジウム「漢文の自言語による訓読」)
小助川貞次(2005b)「敦煌漢文文献における破音加点の背景」(第92回訓点語学会)
小助川貞次(2005c)「漢籍訓点資料における割注への加点について」(第93回訓点語学会)
小助川貞次(2006)「訓点資料が出来上がるプロセスについて」(『訓点語と訓点資料』第117輯)
小助川貞次(2007a)「東アジア漢文訓読資料としての敦煌加点本の意義」(『国語国文研究』第131号)
小助川貞次(2007b)「敦煌本毛詩鄭箋(S.10)について」(科研報告書『大英図書館所蔵朝鮮本及び日本古書の文献学的・語学的研究』, 研究代表者: 藤本幸夫)
小助川貞次(2007c)「日本語訓点資料における破音の意義」(韓国国際ワークショップ「古代韓日の言語と文字」, ソウル大学校 → 『口訣研究』第20輯に収録)
小助川貞次(2007d)「漢字文化圏における中国語と日本語の訓読加点の様相」(国際シンポジウム「日本漢文の黎明と発達」, 二松学舎大学)
小助川貞次(2007e)「敦煌加点本を巡る研究課題」(第97回訓点語学会)
小助川貞次(2007f)「漢文訓読研究の国際的共有と教育的還元について」(第36回富山大学国語教育学会)
小助川貞次(2008a)「訓点資料の展開史における有鄰館蔵『春秋経伝集解卷第二』の位置」(『日本語の研究』第4巻第1号)
小助川貞次(2008b)「日本語訓点資料における破音の意義」(『口訣研究』第20輯)
小助川貞次(2008c)「訓点資料解読の方法と実際—有鄰館蔵『春秋経伝集解卷第二』を中心に」(2008韓国国際ワークショップ「古代韓日の言語文化比較研究」, ソウル大学校奎章閣韓国学研究院)
小助川貞次(2008d)「有鄰館蔵『春秋経伝集解卷第二』釈文及び訓読文」(『訓点語と訓点資料』第120輯)
小助川貞次(2008e)「訓点資料として見た敦煌本尚書の諸相」(第98回訓点語学会)
小林芳規(1995)「敦煌の角筆文献—大英図書館蔵「観音経」(S.5556)の加点—」(『訓点語と訓点資料』第96輯)
小林芳規(1997)「敦煌文献に加点された角筆の符号と注記及び本邦の古訓点との関係」(『訓点語と訓点資料』第100輯)
小林芳規・西村浩子(2001)「韓国遺存の角筆文献調査報告」(『訓点語と訓点資料』第107輯)
小林芳規(2002a)「韓国における角筆文献の発見とその意義—日本古訓点との関係」(『朝鮮学報』第182輯)
小林芳規(2002b)「韓国の角筆点と日本の古訓点との関係」(『口訣研究』第8輯)
小林芳規(2003)「新羅經典に書入れられた角筆文字と符号—京都・大谷大学蔵『判比量論』からの発見」(『口訣研究』第10輯)
小林芳規・西村浩子(2003)「日本における華嚴経の講説と初期加点資料について」(鄭在永編『韓国角筆符号口訣資料と日本訓点資料の研究』, 韓国・太学社)
小林芳規(2004)『角筆文献研究導論』(汲古書院)
小林芳規(2007)「日本に伝来した宗版一切経の角筆加点—韓国の角筆点吐との関連」(韓国国際ワークショップ「古代韓日の言語と文字」, ソウル大学校)
庄垣内正弘(2001)「ウイグル語における漢文訓読」(国際ワークショップ「漢文古版本とその受容(訓読)」, 北海道大学)

敦煌加点本を巡る研究課題

渡邊明義(2004)「国際交流と装幀界」(『平成16年度国宝修理装幀師連盟第10回定期研修会記念国際シンポジウム』要旨集)

Mark Barnard(2004)「大英図書館におけるアジアの写本と文献の保存修復:過去, 現在, そして未来」(『平成16年度国宝修理装幀師連盟第10回定期研修会記念国際シンポジウム』要旨集)

Nguyen Thi OANH(2006)「ベトナム漢文訓読について—『嶺南摭怪』を中心に—」(国際ワークショップ「典籍交流(訓読)と漢字情報」, 北海道大学)

付記・謝辞

本稿は第97回訓点語学会(2007年10月14日)における口頭発表原稿「敦煌加点本を巡る研究課題」をもとに, その後の調査研究を踏まえて加筆・補訂したものである。資料の閲覧に際して, 大英図書館, フランス国立図書館, ベトナム社会科学院漢喃研究, (財)東洋文庫及び韓国口訣学会に格別なる御高配を賜った。厚くお礼申し上げます。なお本稿は, 日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究B(海外学術調査)「国際的視点から見た漢字文化圏における漢文訓読についての実証的研究」(課題番号:19401024, 研究代表者:小助川貞次)による研究成果の一部である。